

2020年4月26日(日)

## 上尾合同教会

聖書 詩編6編1~11節

マタイによる福音書 7章21~23節

説教 「詩編⑥—主よ、癒して下さい」

武田真治牧師

皆さま、お元気でお過ごしでしょうか。家庭で今、礼拝を捧げておられる方々の礼拝の上に、神様からのお守りと祝福を祈ります。また、お一人で礼拝を捧げておられる、その方の上にも、神様からのお支えとお守りが豊かに注がれますようにとお祈りいたします。

毎月月末の日曜日には、詩編を一つずつ読み続けております。今日は、詩編第6編なのですが、昨週のヨハネの黙示録もそうでしたし、今日のこの詩編6編でも、新型コロナウイルスに脅かされている私たちへの神様からの言葉だなど、私はつくづく思われています。と、言いますのも、この詩編6編というのは、病気に侵されている人が祈っている詩編なんですね。病にありながら、その病気をどうか癒してくださいと、そう求めている祈りが、この詩編6編です。実際に読み進めてまいりましょう。

旧約聖書 838 ページ 詩編6編2節より。「主よ、怒ってわたしを責めないでください／憤って懲らしめないでください。主よ、憐れんでください／わたしは嘆き悲しんでいます。」

これは、「神様、もうこれ以上私を責めないでください、怒らないでください。」というふうに、最初祈ってらっしゃいます。これは、この人が悪いことをして、犯罪をして、神様から叱られている。罰を受けている。そういう状況を考えてしまいますので、病気とはあまり関係ないと思われるかもしれませんが。しかしそれはそうではなくて、聖書の解説者によりますと、その昔、つまりこの詩編6編が祈られた頃の時代というのは、今と違って病気の原因がわからない。それこそ、病原体とかウイルスによって発症するとかは、わかってなかったわけですね。そうしますと、病気にかかってしまったことが、神様からの懲らしめといたしますか、裁きだと考えたんだと、そう解説者は言っています。だからこの「怒って私を責めないで、懲らしめないでください。」と祈り始めているのだと。だから、「病気を取り除いてください。」という祈りだということですね。確かにそうなのでしょう。

ですから、病気の原因がわかっている現代人は、このように祈らないのだと、その解説者の方々は言うてらっしゃるんですけども、でも、どうでしょうか。現代の人たち、病気の原因がわかっている。ウイルスだ、病原体だとわかっていたとしても、

じゃあ、現代の人が病気にかからないように、お宮にお払いに行ったり、あるいは家族が病気になったらお百度参りですか？お宮に行ったり、あるいは、仏壇で念仏をしたりするっていうのは、今でもそういう人はおられますよね。

考えてみれば今回のウイルスのことにしても、単にウイルスが悪いこととして、その病原菌を早く駆逐してしまう薬が開発されて、そしたらそれでもう何事もなかったように終わる。それでいいんでしょうか。

むしろ、こういう状態になってしまった、それこそ、普段から私たちの社会・世の中が、伝染病に対する準備、備えを果たしてきたんだろうか。今この状態の中で私たちは何を大事にし、考えていかなければいけないのかということ、想定外のこの出来事が起こったという事。しかしこれを、神様からのですね、私たちは、問いかけ、あるいは試練であると考えて、自分たちの生活の仕方や行動を考えていく、一つの良いきっかけとして考えていかなければならないと、私どもはそう思うのですけれども、単に、これは病原菌が単になせる業、ということだけではないのではないのか。また、そういう風にしてしまってそれで終わるといふことにしてはいけなと、改めて思うのですが、いかがでしょうか？

少なくともこの詩編 6 編の祈りでは、自分と病のただ中から、自分と病のことを考えていく中から、神様の事、自分のことを考え続ける、問い続ける。そうしているのが、この詩編 6 編です。まず、自分の現状をこういう風に、この詩人は語っています。3 節「主よ、憐れんでください／わたしは嘆き悲しんでいます。主よ、癒してください、わたしの骨は恐れ／わたしの魂は恐れおののいています。主よ、いつまでなのでしょう。」と。

ここに、病気の状況が出てまいりますね。「癒してください、わたしの骨は恐れ」これが、少しおかしな表現だと思われた方がおられるかもしれません。「骨が恐れ」一前の教会訳（口語訳聖書）は、「わたしの骨は悩み苦しんでいます。」と訳してあって、それでも『骨が悩む』というの、しっくりこない。一昨年刊行された新しい聖書協会訳では、「私の骨はおののいています。」と訳しています。

実は、この原文、「恐れている」「おののく」とかと訳されている元々の言葉が、ヘブライ語の『バー・ヘイル』という言葉ですね。これは、実は＜ガタガタ震える＞とい

う意味なんです。「骨がガタガタ震える。」＜骨＞は、骨という言葉なんですけど。じゃあ、＜ガタガタ震える＞というのは、例えば、恐ろしい体験をしたり、とても恐怖の体験をしたら、ガタガタ震えますよね。あれだ、と理解するならば、新共同訳は、「骨は恐れている」と訳しました。

あるいは、＜熱が出た＞という解釈もあります。熱が出ると、ガタガタ震えますよね。だから、「骨は恐れ」というのは、＜全身が熱に侵されて骨が震えてるんだ＞という解説者もいますし、もう一つ、私はこれがいいんじゃないかと思うのは、入院なさった経験のある方は、お分かりになっていただけるんじゃないかと思いますが、例えば病気で 4・5 日でもベッドに寝てしまっている状態になりますと、体全体の力が弱くなりますよね。そして、いざベッドから立ち上がろうとしますと、脚がふらつく、ガタガタする。脚がうまく支えられない経験がおありの方には、分かっているんじゃないかと思います。「わたしの骨は恐れ」というのは、もう骨の力が、体力が、力が弱くなってしまっているということを言っているんじゃないか。そう考えると、4 節です。「わたしの魂は恐れおののいています。」この＜恐れおののく＞も、実は先ほどの＜骨が恐れる＞と同じ『バー・ヘイル』が使われていますよね。今度、その体が弱まっている、力が弱まっている、あるいは骨がですね、こうガタガタ震えてしまっていると同時に、魂が、心も恐れている。ガタガタ震えているというのです。

ここが、この詩編のすばらしさ・深さだと言われています。なぜかというならば、私たち、病気になるという時、単に体が弱くなる、体が弱まる、骨が弱くなって、自分の力がなくなったな。免疫力が落ちたなど、体の弱さばかりを考えてしまっているかも知れないが、この詩編の詩人はね、病気になった、体が弱くなった、と同時に、魂も弱く、つまり心も病、病気になっていると言っているのです。心と体は密接に繋がっているんだという理解なんです。体がガタガタ震えている。弱くなった。心も弱くなっているんですって言っているんです。ガタガタ震えてますって。

体と心は繋がっているんだ。これは、今でも私たちの、現代の共通の認識ではないでしょうか。病気になるというのは、日本語でも病気、気が病、病は気からといったりますよね。そのように、心、体だけが病むのではなくて、心も悪い影響を与えられるわけですよ。そして、逆に心が不安になったり恐れたり、心が病になることに

よって、体も病になる。心と体は繋がっている。気が弱くなってしまいうってということが、あるのではないのでしょうか。まさにそのことを言っているんですね。第 6 編。すごいですよね。体が弱くなった。魂も弱くなった。体と心は切り離せない。体も心もガタガタしてしまっているんですって言ってるんですよ。不安に苛まれてしまっているんだ、ということなんですよ。

また、この魂と訳されている言葉の原文は、『ネフェシュー』という言葉です。もともと<息>という言葉から来ているんです。そこから、息をする、命、とも訳せる言葉。熱が出て、息がハアハア言ったり、病気になるとね、体力が無くなっても、息がハアハアする。あるいは体力が無くなっても息がハアハアする。あるいは、心が弱くなって、力がなくなる、抵抗力がなくなる。と同時に命も衰えている。もっと言うと、生命力ですね。生きようとする力、魂、心さえも萎えてしまっているんだと。生きる力さえも無くなってしまっている。そういうふうにも、言っている言葉なんですよ。

ある英語の聖書は、ちょっと前の 3 節「主よ、憐れんでください／わたしは嘆き悲しんでいます。」この言葉を、NEW JERUSALEM BIBLE という聖書ですが、”I’m fading away.”と訳しています。“fade away”「私は消え去りそうだ。」と訳しています。まさに、消えそうだ。つまり、嘆き悲しんでいるというよりは、もう私の存在そのものが、命そのものが消えかかっている。この病気で、そういう状態なんです。それは、体だけじゃないんです。心。病によって自分はもう、消え去ってしまいそうな気持ちになってしまっている。そういう訳で、素晴らしい翻訳だなと思います。まさに、そういう感じなんです。心も体ももう弱くなって、自分の存在そのものが消え去ってしまいそうな、だから、5 節「主よ、立ち帰り／わたしの魂を助け出してください。」体だけじゃない。生命力、生きる力というか、生きようとする力そのものが、もう萎えてしまっているんだ。命そのものがもう、途切れさせようとしている。だから主よ、私の『ネフェシュー』を助け出してください。「あなたの慈しみにふさわしく／わたしを救ってください。」

生命力・命なんだ、というのですね。だから、6 節「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず／陰府に入れば／だれもあなたに感謝をささげません。」つまり、死が問題になってくるんです。命だからです。生命力、もう消えかかっている

ようなところなんだ。もし、この命、消えかかっているような私の生命力、気力がなくなって、このまま死んでしまったら、誰があなたの名を唱え、つまり礼拝をして、讃美をして、誰も死者の国(シオール)、黄泉に行ってしまうえば、誰もあなたに感謝を捧げませんよ。死んだら終わりじゃないですか。私をこのまま放っておいて、このまま生きる力が無くなってしまっていたら、誰があなたを讃美するんですか？

ある意味、半分脅しのような言葉かもしれません。神様、私を殺してこのままにしていいますか、と。あなたを讃美する心さえ、想い、存在を無くしてしまっているんですか？だから、逆に言うならば、生きる力を、私の存在そのもの、魂を、命を助け出してください。そういうふう祈っているんです。どうでしょうか？

ですから、この後のキリスト教の歴史では、詩編 6 編はとても愛されてきました。信仰者の嘆きの歌、祈りの歌として、読み継がれてきた。カトリック教会では、詩編の中から7つの嘆きの歌、あるいは、悔い改めの詩編と呼ばれる詩編としてとても大事に、例えば受難週とかレントの時に繰り返し読まれる 7 つの詩編がある。その中の一つとして、とても重要にされてきたのはこの 6 編です。7 つとはどんなものがあるかと申しますと、詩編32、38、51、102、130、143編。あとから、読んでいただければ、なるほどなど分かっていただけたと思います。そういう詩編として読まれてきましたし、宗教改革者マルティン・ルターもとても愛した詩編の一つです。また、同じ宗教改革者のカルバンも特にこの詩編の 4 節ですね。4 節の言葉をすぐいろんな所で、彼は引用して用いています。4 節「わたしの魂は恐れおののいています。」これも『ネフェシュー』ですね。「主よ、いつまでなのでしょう。」このことを、特にカルバンは注目しています。

結局私たちの悩み、病の中で、いつこの病気が治るのでしょうかということですよ。主よ、いつまで私はこの病の中で悩まなければならないのですか？いつまで苦しまなければならないのですか？良くなる日付、といいますが、間もなく良くなるというならそこまで頑張れますよね、私たち。この新型コロナウイルスの問題も、あと何日と決まっていれば、自粛も頑張れますよね。これが、ズルズルずるずる、半年も一年も、もし続くとになったら、先が見えなくなったら苦しいです。本当に生きる力、生命力が衰えていってしまう。自分自身の心が、病になってしまう。ここで言われて

いるわけですよ。

ですから、6 節の「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず／陰府に入れ  
ば／だれもあなたに感謝をささげません。」というのは、まさにこの病が、この状況  
が死まで続いてしまったら、何にもならないじゃないですか。この自分の、今の、悩  
んだり、苦しんだり、考えたり、そうしていることが死に（直面）してしまったら、何も  
なりません。そういう風な不安に苛まれているんですよ。そうすると 7 節「わたしは  
嘆き疲れました。夜ごと涙は床に溢れ、寝床は漂うほどです。」これ凄い表現です  
ね。夜ごと毎晩そのことを考える。病だけでなく、この病がどこまで続くのか。それを  
考えると、自分の魂・生命力、『ネフェシュー』が衰えていくんだ。もうガタガタ震え  
る。居ても立っても居られないような状況になる。このまま死まで続くのだろうか。そ  
う考えると、毎晩、涙が出てしまうんだよ。それが、床に溢れてきて、「寝床は漂うほ  
ど」というのは、その涙でべとべとになって、ベッドが水で浮いてしまうほど。あるい  
は、寝ている寝具が水でふやけて浮いちゃうくらい、そういうふうにならなくなっ  
ちゃうんだ。それはもちろん、誇張表現なんですけど、それほど毎日毎晩、人知れず、  
このことで悩み、涙を濡らして、これはいつまで何だろうか。あるいは、この恐怖は  
いつまで続くのだろうか。ああ。という風に、考えれば考えるほど自分は、どんどん  
落ち込んでしまうんだということです。

8 節「苦悩にわたしの目は衰えて行き／わたしを苦しめる者のゆえに／老いて  
しまいました。」これは何を言っているのかということ、目が見えなくなってしまった、と  
いう。「老いてしまいました。」老いてしまったというのは、年を取ったというのではな  
くて、しぼんでしまうという元々の言葉なんですけれども、生命力も含めて体そのもの  
も含めて、しぼんでしまうという。悩みで目が見えなくなる。もう一つは、先が見え  
なくなってしまう。希望が持てない、先が真っ暗。そのことを思うと自分は、年  
を取ってしまった、老いてしまった。もうしぼんでしまったように、このまま思いま  
すという風に、ここまで、追い詰められているんですよ。ずっと、自分の病の事、これか  
ら先のことを、死まで続くのだろうか。このまま死んでしまうのだろうかと考えてい  
くと、真っ暗になってしまう。本当に自分、年取ったなとそういう風に思ってしまう。と  
つても私たちが良くわかる。本当に、病になった方は、共感していただけるような詩編

ではないでしょうか。どうでしょうか？

ただ、以上が 8 節までですが、9 節には、ここまで悩んでいた詩人がですね、急  
にこういう言葉になるんですよ。9 節より「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。主は  
わたしの泣く声を聞き／主はわたしの嘆きを聞き／主はわたしの祈りを受け入れ  
てくださる。敵は皆、恥に落とされて恐れおののき／たちまち退いて、恥に落とされ  
る。」急に立ち上がる感じですよ。しかも、信仰によって、自分を奮い立たせてい  
る。「主はわたしの泣く声を聞き／主はわたしの嘆きを聞き／主はわたしの祈り  
を受け入れてくださる。」先ほどの 2 節のですね、いつまで私のことを責めているん  
ですか？懲らしめないでくださいと言っている詩人が、ずっと自分の悩みの状態で、  
体や心、そしていつまで続くのだろうか、というふうに夜ごと涙を流す。しかし、そ  
こで終わらないんだということです。もう一度立ち上がることが出来るんだ。もう一度  
立ち上がって、信仰を持って奮い立たせていくようになった。その原因、理由とい  
うことが、一番大事なことと私は思います。

急に、立ち上がった。だから、解説者によってはちょっと斜めに見る。9～11 節は、  
とってつけたようだから、あとから編集者が付け加えた言葉だと平気で解説しちゃ  
う人もいます。何が、その詩人を、祈っ  
ている人を、変えたのか。8 節「苦悩にわたしの目は衰えて行き／わたしを苦しめ  
る者のゆえに／老いてしまいました。」9 節「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」何  
で、この詩人が変わったのかということ、「苦しめる者」そして「悪を行う者」とは、こ  
れ神様じゃないですよ。自分自身を苦しめる者のゆえに、最初 2 節では「怒ってわ  
たしを責めないでください／憤って懲らしめないでください。」神様、あなたは何で  
こんなに苦しい目にあわせるんですか？何でこんな病気を私にあわせるんです  
か？もう、心も体もボロボロですよって言ってるわけですよ。何とかしてください。  
生きる力さえないですよって言っているわけです。

そして、毎朝毎晩悩んでいた結果、「わたしを苦しめる者のゆえに／老いてしま  
いました。」「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」というのは、この苦しみを与えて  
いるものは、神様じゃないんだ。ということですよ。神様が自分にはいるん  
だ。この「悪を行う者」、「わたしを離れよ。」たくさんいます。皆と言ってますか

ら。ということは、その「悪を行う者」に自分は今取り囲まれてしまっていて、こんなに苦しい状態。私は老いてしまう、しばませてしまう、この生命力を。こういう風にしてしまったんだ。複数形ですね。「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」っていう風になってるんです。これは、自分の闘うべき敵と言う者が何かということが分かったんだと思われま。ずっと自分の、最初は神様がこんなに苦しみにあわせるんだと思っていたわけでしょ。神様が悪いんだと思っていた。何とかしろよ、と言ってたんです。ところが、自分が衰えていく、生命力が衰えていく。そして、「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず／陰府に入れば・・・」このまま死んでしまっていていいのかと考えてしまって、嘆き疲れて、いろんなことを考えていく内に目が衰えてしまったんだ。もう将来も見えなくなりました。でも、その時にふと気づくんだ。私を苦しめているものがある。だから、私は老いてしまったんだ。こんなにしばんでしまったんだ。

9 節このわたしに「悪を行う者」をわたしから離れなければ、私は解放されない。どんどん、どんどんしばんでしまう。衰えていくだけで、とっているわけです。それで、この「悪を行う者」「わたしを苦しめる者」は何かというと、もちろん病気ですね。病っていう風に考える。もう一つ入っていると思います。しかし、病だけじゃないんです。その病に関わって、心・魂が恐れおののく。魂が恐れている、震えている、ガタガタしている。これは恐怖ですよ。恐怖ですよ。何に対する恐怖か。このまま、この病気で滅んで行ってしまうかもしれない。自分の、自分自身のこの生きる力がなくなってしまうかもしれない。そして死を、だから考える。6 節「死の国へ行けば、だれもあなたの名を唱えず／陰府に入れば／だれもあなたに感謝をささげません。」死への恐怖です。このまま死んじゃってしまうのではないかと、そうならつまらない。ああ、どうしようかって思う、その死に対する恐怖なんです。それを、どんどん自分が苛まれていくうちに、目さえも見えなくなってしまう、逆に、心の目が開くというのか、何で俺はこんなに苦しまなくてはいらないんだ、何で私はこんなにつらい目になっているんだろうかと思うときに、私を苦しめている者がいるんだ。それゆえに、私はこんなに衰えていってしまった。だから、9 節「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」そういう死への恐怖、病、病への恐れ、そしてこのあとどうしたらいいのかという、未来がみえないという恐怖、将来への恐れ。自分がどんどんそういう恐怖を取

り囲んでいってしまった、自分がどんどん、どんどん苦しい思いになって、目も見えなくなりました。先も見えなくなりました。そのことと、自分は闘っていかなくちゃいけないんだと気づいた、ということなんです。「わたしを苦しめる者」のゆえに、こういう者があるから、私はこんなにしばんでしまった、というんです。

だから、「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」と。このような、病にまつわる恐れや不安、そして死の恐怖、それらが自分を取り囲んで苦しみや深いものにどんどん自分が落ち込んでしまった。もう自分の気持ち、心さえも病んでしまうような苦しみや状況になってしまったんだ。でも、これらと闘わなくちゃっていうことですよ。この恐れや恐怖、死への恐れとか、そういうものと闘わなくちゃいけないんだ。神様と闘うじゃないんだ。この悪を、自分に悪い者をおとしめている、その「悪を行う者」と自分は闘わなくてはいけないんだ。これと離れさせていく、これを取り除く、これを離れさせていく。取り除いてくださるものは何かというと、9 節「主はわたしの泣く声を聞き／主はわたしの嘆きを聞き／主はわたしの祈りを受け入れてくださる。敵は皆、恥に落とされて恐れおののき／たちまち退いて、恥に落とされる。」ということは、私が主を、神様を本当に信頼しこの声を聴いてくださる。そして、嘆きを聴いて、祈りを受け入れてくださるはずだ。そこに立った時に初めて、私をこう絶望に、暗闇に引きずりおろそうとしているその恐怖や死の恐怖や病というものから、私は解き放たれるんだ。「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」このことばかりに自分がとぐろを巻いているように、そのことばかりに関わっている限り、私は衰えていくんだ。老いていくしかないじゃないかというんです。これを解放してくれるのは、主しかないんだ、イエスさま、神様しかないのだ、というんです。

この「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」という言葉、実は、イエスさまも使っておられるのだということが、マタイによる福音書 7 章 21 節から 23 節に出ています。もう読みませんが、そこでもイエスさまが闘うべき相手を定めておられて、そして、「悪を行う者よ、皆わたしから離れ去れ。」という風におっしゃってるところなんです。闘うべき相手をはっきりしてらっしゃるところなんです。

この詩編第 6 編をイエスさまは、そういう風に読まれたんじゃないでしょうか。闘うべき相手とホントに闘うべきなんだ。

現在、この新型コロナウイルスの脅威に我々はさらされているわけですがけれども、今日の箇所から教えられること、示されていることは、厳しいかも知れない、きついかも知れませんが、この苦しみや困難のただ中で、とことん考えるんだ。とことん考え抜いて、何と私たちが闘っていかなくてはならないのか。何が私たちが捉えているのか。それが見えてくるまで、私たちがやっぱり祈り、そして考えていく。それを闘うべき相手、「神様、何でこんな苦しみを与えたんだ。」「もっとこの苦しみを取り除いてくれ。早く病を癒してくれ。」というだけではなくて、本当に考え祈っていくときに、自分たちが何をしなければいけないのか。闘う相手が分かってくるんだ。そしてそれを闘う方法は、やはり主なる神様への信頼なんだと。

そう言うことなのではないかと思うのですが、それは辛いですよ。大変かも知れないけれども、その相手がしっかりと定められれば、我々は立ち上がっていきませんか。力を与えられていくんじゃないかと。何よりですね、これは死への恐怖ですよ。その死への恐怖を、解放、解決してくれるのは、主イエス・キリスト、イエスさまの復活の力がなければ、いつまでたってもこの死への恐怖からは解放されないように思います。

今日の詩編第 6 編は、この中心は、多くの専門の人たちが言うんですけども、一番の中心は 5 節だと言います。「主よ、立ち帰り／わたしの魂を助け出してください。あなたの慈しみにふさわしく／わたしを救ってください。」「主よ、立ち帰り／わたしの魂を助け出してください。」これ、とってもいい言葉ですね。最後にこれを思わされるんですね。「主よ、立ち帰り」というのは、私たちが神様の方に悔い改めて立ち帰るんじゃないんです。「神様、主よ、私のもとに来てください。」それが、本来の意味です。私のもとに立ち帰ってください。来てください。そうしたら、私の魂は助けられるというのが、もともとの言葉なんです。私たちが悔い改めて、神様の方へ立ち帰るんじゃないんです。主よ、私の方に来てください、立ち帰ってください。私の魂を、そばに来てくださって、そして助け出してください。そしてこれがもう、クリスマスだというんですね。ああ、その通りだなと思います。

主が私たちの側に、我々の伴に来てくださった。そのことによって、私たちが力与えられ、魂が助けられるんだよ、というわけです。主が我々を助けるために来てくだ

さったんだ。そして、私たちが天の道へと、復権への道へと、復活への道をつけてくださって、新しい死を超えていく、死は終わりではないのだ、という。その向こうに、新しい命が与えられている。天で、御国で待っているからね、とそう言うてくださっている、その主を見上げながら生きていく時に、「悪を行う者よ、皆わたしを離れよ。」とそう言うて立ち上がっていきける力も与えられるのではないのでしょうか。

祈ります

天の父なる神様

詩編を通して、私たちもまた病に本当に心も体もズタズタにされる、そういう時を経験します。辛いです。

苦しいと、本当にあなたに向かって声をあげます。

そのことをあなたは、良しとしてくださいます。

この詩編の「私を責めないでください、主よ、憤って懲らしめないでください」とそう神様に向かって叫んでいるそのことを、あなたは赦してください。

しかし、その叫びの中で、私たちが本当に闘うべき相手、何と格闘していきなきゃいけないか。

ちゃんと向き合っていけますように、導いてください。

我々は弱いものです。すぐ逃げます。

どうぞ、そうでなくて本当にこの困難な中、病の中、しっかりと向き合っていけますように。

この困難と向き合っていけますように、導いてください。

どうぞそのために主よ、私たちの伴に来てくださいますように。

ここに力を注ぎ、聖霊を注いでくださいますように。

その時、私たちは救われます。魂が助けられます。

どうぞ、癒しと生きる力を私たちに注いでくださいますように。

御名によって祈ります。

アーメン